

〔閑窓瑣談四〕檜スギの功き能

世の人檜の枝葉は佛事にのみ用ゆるものにて、忌々しき様に嫌ふて不吉の物とす、大ひなる心得たがへなるべし、檜は昔歌にもよまれたり、萬葉集に、曾根の好忠

愛宕山檜が原は雪つもり花つむ人の跡だにもなし、檜は愛宕の名木なり、亦檜は、其香清淨にて、神佛に備へ、不淨を除く、墓原に檜をさし置ば、獸怖れて墓をあばき人の尸を破る事あたはず、夫故に墓所に備へ獸を除く用心とす、山近き田畑にて猪猿の類が畑物を取ざる様に、多く檜を植又は掘て置芋などに檜の枝を折て蓋とし置ば、獸來りて取事能はずといふ、猶功能多し、眼病の熱を醒すには、墓所の水に落て腐たる檜の露を眼に付れば、忽ち平愈す、檜の葉を煎じ用ひてもよし、

深山檜

〔和漢三才圖會八十二〕深山檜 正字未詳

按深山檜樹葉似檜而葉不韌其香略似山礬花香、四月開細白花、秋結子、赤色似仙靈子、採葉陰乾爲藥、氣味辛苦微 治疝氣腰脚痛甘草小入煎服、

蠟梅

〔書言字考節用集六〕蠟梅一名黃梅、活法、本非梅類、以其與梅生植、蠟梅同時、香又相近、色酷似蜜梅、故名。

〔大和本草花十二〕蠟梅 本草灌木ニ載ス、近年中夏ヨリワタル、臘月ニ小黃花ヲ開ク、蘭ノ香ニ似タ

リ、中華ノ書ニ多ク記シ詩ニモ詠ゼリ、花ノ容ハ不好、葉ハ柿ニ似テ、柿ノ葉ヨリ小ニシテ長シ、葉ニ少シイラアリ、其高二三尺四五尺ニスギズ、大阪ニテハカラ梅ト云、又蘭梅ト云、梅ノ類ニハアラズ、根ニ香氣アリ、味辛辣也、如木香ト云、中華ノ本ノ名ハ、黃梅、後世稱蠟梅ト云ヘリ、

〔和漢三才圖會八十四〕蠟梅 黃梅花 俗云南京梅

按蠟梅花六出、單葉以小梅花而黃色、其枝柔韌遠見則彷彿倭連翹、但連翹花四出而蓋形爾、

〔古今要覽稿草木〕蠟梅